

第2回学校運営協議会記録

【委員】

氏名	役職	出欠状況
渥美建治	北区北地区民生委員・児童委員協議会副会長	出席
小泉詔信	北24条商店街振興組合理事長	欠席
杉本五郎	北海道札幌聾学校同窓会会長	欠席
只石亜由美	北海道札幌聾学校 PTA 会長	出席
渋谷雄幸	公益社団法人札幌聴覚障害者協会理事長	出席
高野賢一	札幌医科大学医学部教授	出席
船山大介	放課後デイサービスふくろう管理者	出席
佐藤信太郎	北海道警察札幌方面北警察署生活安全課長	出席
佐賀聡	北海道札幌北高等学校長	欠席
四木定宏	北海道札幌聾学校長	出席

【各委員からの話題提供】

- ・子どもの学習意欲の高さは本校の強みだと思う。幼稚部の時から、遊びを通して指導を受けていることもあり、幼少期から培われている成果だと思う。
- ・聾学校は小集団なので、今後、社会の大きなコミュニティで自分の意見を言えるか、周りとの協調して話ができるかなどが、聾学校の子どもの課題になると思う。
- ・聾学校では小さな学習集団であることを踏まえ、地域の小学校・中学校・高校で求められる一般的な学力を意識していくことが大切。
- ・聴覚障がい者の方が社会に出た後、どこで、どのように社会生活を過ごしているのか知りたい。
- ・聾学校でも SNS の危険性などについて学習する取組を行っているが、警察でも非行防止教室などを行っているので、SNS や携帯電話の使い方などで活用してもらいたい。
- ・聾学校は災害時の避難指定になっていない。一次避難所の機能があると良い。
- ・地域の小・中学校等に転校した後のフォローや、卒業後の連携が必要である。
- ・聾学校ではセルフアドボカシーの教育ができていると思うし、充実している。今後も力を入れてもらいたい領域である。
- ・聴覚障がいのある子どもへの教育では、ICT の活用は有効なので、もっと進めてほしい。
- ・本校の子どもの強みは素直さがあること。疑いの目を向けずにまずは受け止めるとよい。そうすることで社会に出てからも働く力につながる。
- ・経験値の低さ、特に失敗の経験が少ないということ強く感じる。我が子ができるだけ困らないように保護者が先回りしてしまったり、失敗をさせないように、あらかじめ準備を整えてしまったりすることがある。学校段階で失敗するという貴重な経験を得られないと、親元を離れた後に失敗した際に、その失敗に対応できないことがある。

【こうなってほしい、本校の子どもの18歳の姿 ～地域とともにある学校であるために～】

<子どもの姿>

- ・自分で職場に行き、帰ってくるなど、自立した生活が送れるようになってほしい。
- ・仕事を辞めずに、最後まで続ける力を身に付けてほしい。
- ・余暇の時間を自分で楽しめるようになってほしい。
- ・どのようなやり方でもよいので、他者とのコミュニケーションを積極的にとれるようになってほしい。
- ・将来のために、小学生からデジタル技術、パソコンの技術、スマホ技術を身に付け、高めてほしい。
- ・制度や社会状況の理解を深め、社会の壁に立ち向かえるような社会人になってほしい。
- ・自分の考えはこうだということをきちんと話ができ、あきらめず、逃げず、対話ができる大人になってほしい。
- ・障がいに関係なく、生き方が多様化し、選択肢が増えている時代だと思う。その子の能力やモチベーションを生かして、障がいがある理由で断念しない大人になってほしい。自助の力を育み、自分の障がいの状況を理解し、会社や学校に具体的なサポートを望んだり、足りないことを訴えたりすることのできる力を身に付けてほしい。

<地域の姿>

- ・子どもの頃から障がいの有無に関わらず一緒に遊び、仕事し、コミュニケーションしていける社会になればよい。
- ・地域の学校との部活動の連携、学校行事での連携、聾学校生徒による手話講座などの取組が考えられる。
- ・マンションの住人と児童と一緒に花壇を作るなどして、一緒にコミュニケーションをとれたらよい。秋には収穫祭で生徒と一緒に楽しめたら良い。
- ・他校との交流、地域との交流であったり、ICTを活用して、その成果として国際的な交流や世界の聴覚障がいの子ども達とのイベント等を通じて交流し、関わり、多様性を尊重する心や社会性を育ててほしい。
- ・この地域は、ろう、難聴の子どもがいるということを前提として、理解しようと努めてくれている。それだけでよい環境だと思う。
- ・将来の生きる力を育むことができるような経験、例えば、地域にある様々な仕事を体験することを通して、働くということを考える機会などが提供できるとよい。